

ボルヘスを語る人たち

日曜日の午後4時。代官山のカフェに10人を越える人が続々と集まってくる。猫町倶楽部の読書会のひとつ「東京文学サロン月曜会」の定例会だ。

この日の課題本はホルヘ・ルイス・ボルヘス著『伝奇集』。南米文学のなかでも極北とされ、古今東西の伝説、神話、哲学を題材に織りなされる迷宮のような作品だ。難解な文学作品にも関わらず、どのグループも話題は尽きず、読書会後の懇親パーティも9割以上が参加、夜9時すぎまで盛り上がった。



本業は建築業の
山本多津也さん
「猫町倶楽部」代表

「猫町倶楽部」とは？

猫町倶楽部は、毎月指定される課題本を読了してくれるのが参加条件の読書会だ。8〜10名のグループに分かれて進行役に従って2時間近くディスカッションする。ルールは「他人の意見の否定はNG」のひとつだけ。ディスカッションといつても堅苦しいものではなく、「テーマのあるおしゃべり」といった感じだ。参加条件に「ドレス・コード」があつたり、課題本にちなんだ音楽を聴くなど、「遊び」の要素も多く取り入れている。著者や文化人を招いて、読書会に参加してもらうこともある。

2006年に名古屋でつた4人のビジネス勉強会から始まったこの読書会は、徐々に活動の場を広げ、いまやメンバー数7000人を超す日本最大級の読書クラブに成長した。参加者は20〜30代が中心。ビジネス・人文系「アウトプット勉強会」、文学系「文学サロン月曜会」、アート・芸術系「藝

術部」、アンダーグラウンド系「猫町U」など、さまざまなジャンルの読書会を企画している。課題本によっては20〜30人の参加者にもなる。数ある読書会のなかでも、猫町倶楽部は集まる人数が突出して多いのが特徴だ。ソーシャルメディアの利用をきっかけに参加者が急増したが、設立当初からこんな大規模の読書会にしようと思つていたわけではない。読者が参加条件にも関わらず、こんな多くの人が集まってくるのかと、こちらのほうが驚いているくらいだ。

本を媒介に関係を作る

メンバーに参加の動機を聞くと、「本が好きなんだけど、まわりにも本のことを話せる人がいないから」と答える人が圧倒的に多い。同じ本を読んだ人と語り合いたいということだろう。コミュニケーションには「経験の共有」がぜひとも必要だが、読書会は同じ本を読んでいるので、初対面同士でも話題をきこちなく探す必要は

読書を始まりに、人と繋がる「猫町倶楽部」

「猫町倶楽部」代表 山本多津也



「猫町倶楽部」はオフイスの会議室やカフェなどで開催される

猫町倶楽部のもうひとつの特筆すべき点は、人間関係のトラブルが極端に少ないことだ。いまだかつてそういったトラブルで困つたことが一度もない。「課題本の読了」がある種のフィルターとして機能しているからか、このようなオフ会（インターネット上で活動するグループ）に所属するメンバー

ない。自己紹介と同時にスムーズにコミュニケーションが始まる。本を媒介にすることで、ふだんならできないような深い話に発展することも多い。世代を越えてフラットな関係を作る場所でもある。そうして数回参加しているうちに、猫町倶楽部がかけがえのない場所になっていく。猫町倶楽部ではここ4年間で19組のゴールインカップルが誕生しているのだ！

本には人と人を繋ぎ理解を深め合うというコミュニケーション・ツールとしての側面がある。これからの時代の本の価値を問うならば、そこに注目すべきだ。出版社や本屋、図書館などの今後の課題は、本を使つていかにコミュニケーションを発生させていくかということではないか。

読んだら「終わり」にしていただこれまでの読書を「始まり」に——猫町倶楽部はこれからも、本の持つ多様な可能性を探していきたい。

本を読まなくなつた、本が売れなくなつたとよく耳にするが、まだまだ本の可能性は捨てたものではない。本は書かれている情報コンテンツだけに価値があるのではない。

いわゆる勉強会ブーム、読書会ブームは3〜4年前をピークに沈静化したようだ。猫町倶楽部はいまでも参加者が増え続けている。おそらく2〜3年先には200人の読書会が普通になるだろうし、一回の読書会に10人集めることも可能になるだろう。開催地も倍に増えていることだろう。

猫町倶楽部のこれからが実際に集まつて行く姿）のなかではかなり珍しい事例だろう。

